

## 京都駅出土の汽車土瓶

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 京都駅構内で見つかった汽車土瓶

**はじめに** 鉄道の旅にはさまざまな楽しみがあります。たとえば今は数少なくなりましたが、電車、気動車や力強い音と迫力ある煙を出す蒸気機関車が主要な駅に停車するたび、短い停車時間内に弁当、お茶、その他の飲み物、おやつを売りにやってくる立売りもひとつの楽しみです。それは旅の潤いであり、その地域の食文化を知る絶好の機会です。しかし今の列車を見ると、特急や新幹線は窓が開かなくなり、立売りの姿もほとんどなく、売り声も聞かれない、「人」の声の少ない、ただ「騒音」だけがこだまするようなホームになってしまいました。

**汽車土瓶** 1999年4月から5月にかけて、京都駅構内で下水道工事に立ち会って調査しました。その時石炭ガラの中から、多量の汽車土瓶と、その蓋や湯呑みが密集して出土しました(写真1)。汽車土瓶はお茶を入れる容器で、湯呑みとセットで販売されていました。

それらの土瓶の側面には、左向きに駅名や販売店の屋号と思われる手書きの文字が書かれ、駅名としては「大津」・「岡山」・「姫○」・「○路・ひめち」・「○トリ」・「米○」・「○○べ」などがあり、屋号は「○筒屋」・「三好○」がありました。[米○]と「○筒屋」は同一個体に描かれ、また土瓶の胎土・釉薬から

みて「姫○・ひめち」と同じ土瓶に描かれたものと思われる「○筒屋」もあります。他に1点、型紙を使って描かれた「姫○」がありました。

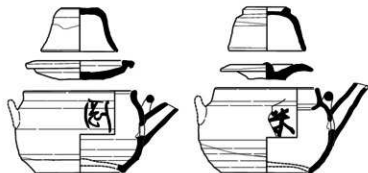
土瓶は、体部最大径が約10.5cm、高さは7～7.5cmで、約2合の容量があり、内面に罫状にめぐる「キ」と呼ばれる落し蓋受けの有るものと無いものがあります。

蓋は「キ」有りとセットになる底部の狭い落し蓋と、「キ」無しとセットになる底部の広いかぶせ蓋があります。落し蓋は直径7～7.5cm、かぶせ蓋は8～9cmです。

湯呑みは素焼きの物や、施軸されて高台が付くものと底部が糸切



大正2年の地図 濃色の鉄道が初代で淡色の鉄道が2代目となる (縮尺1:40,000)  
『日本都市変遷地図集成』京都市西南部より部分掲載一部改編 柏書房株式会社 1987年発行



汽車土瓶の実測図 (縮尺1:3) 湯呑み・かぶせ蓋(左)・落し蓋(右)・土瓶

りで切り離されただけのものがあり、口径は約6cm、高さは3.5~4cmにおさまります。胎土をみると黄灰色、灰色と赤褐色の3種類に、釉薬も黄褐色から灰色ないし白色で、だいたい3種類に分かれます。

その他に、立会地点より北方の1994年の調査で、山水風の絵が描かれた益子焼の土瓶が出土しました(写真2)。この土瓶は従来市販されていたものが汽車土瓶に転用されたとの指摘があり、駅名・屋号が入るものより古いタイプと思われます。これは「ゴミ」の廃棄場所が徐々に南へ移っていった様子を示唆しているかも知れません。

汽車土瓶は、この他にも東京の汐留(新橋)、神戸などで出土し、

各地の駅名が書かれていたことから全国の主要な駅で販売されていたと思われる。

**京都駅の歴史** 京都駅の歴史を振り返ってみると、東海道線の開通で明治10年に神戸から京都まで鉄道が開通した際に初代京都駅が建てられました。

その後、大正天皇の御大典に合わせて京都駅の改築が計画され、2代目は大正3年に初代の駅から南へ約135m移して再建されました。

昭和25年の火災で2代目が焼失した後の3代目と平成9年開業の現在の4代目は、2代目と同じ地点に建設されています。また、線路の位置も2代目と現在のものはほとんど変わりありません。



写真2 山水風の絵が描かれた土瓶

**まとめ** このことと今回の遺物の出土地点を考えると、出土地点は初代の駅からは南の構外、2代目から4代目では構内にあたります。また出土したものは使い捨てられたもの、つまり廃棄物で、量的にも、到底駅前や路線区内に投棄するようなものではなく、人目につきにくい構外か路線区外の空閑地に廃棄し、埋め立てられたものと思われます。

もしそうであれば、これらの遺物は初代京都駅が建てられた以降で2代目の前と限定された、明治10年から大正3年の間に廃棄されたと考えられます。また、伝え聞くところによれば、お茶は明治22年から静岡駅で販売されたそうです。とすると、廃棄された時期は明治22年以降大正3年前と、もうすこし限定されたものとなる可能性があります。

今の鉄道はスピードに走り、列車そのものが閉鎖的になっていますが、乗客とプラットフォームの生き生きとした情景を彷彿とさせるこれらの品々が語る言葉にも耳を傾け、鉄道がゆとりのある「旅」であった頃を振り返るよすががほしいものです。

(竜子 正彦)